表紙, 目次, 雑報, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38313

十全會雜誌

大正二年五月一日發行

第十八卷
第五號
（第八十八號）

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌（第十八卷第五號 第八十八號）目次

○原著及實驗

●特發性角膜脂肪變性ニ就テ。　醫學博士　高安右人

●實習室ニ於テ最近實驗セル著明ナル一二ノ異常。　解剖學教室　中野鑄太郎

○校內雜報

●劍道大會記事。●弓術射初式之記。●講話會例會。●醫科四年祝賀級會。●金澤病院醫事集談會の設立。●第一回金澤病院醫事集談會記事。●學會參列會員。

○叙任及辭令

●陸軍省。●金澤醫學專門學校。●石川縣。

○通　信

●森田齋次氏通信。●林篤氏通信。●馬場庄江氏通信。●村上盛窄氏通信。●村上三男三郎氏通信。●竹中繁次郎氏通信。

○人　事

●生沼、岡島両博士。●千秋了氏。●辻岡律氏。●田中正一氏。●辻本辰次郎氏。●芦澤孝治氏。●仙波宏造氏。●種子田秀吉氏。●岡田虎介氏。●神岡藤一郎氏。●安積鼎氏。●山下銀吉氏。●梶川甚一氏。●相馬甲五郎氏。●村松貞治氏。●阿波加憲吉氏。●稻垣久實氏。●永山昇一氏。●轉居會員。●居所不明會員。

○會　告

●校外特別會員會費納付調書。

島ヲ造ルモノ、更ニ數種アリ關係ナキヲ以テ略ス

三、三頭膊筋異常ノ先例種々アリト雖トモ類似セルモノ全ク見出セス、三角筋及内膊筋ニ於テモ亦タ然リ

四、膊撓骨筋ハ全ク缺クコトアリ又ハ二部ニ分カレ停止部ニ於テ甫メテ合ヘシ其一頭ハ内膊筋ヨリ分カル尚種々アルモ全ク關係ナキヲ以テ省略ス其レ斯ノ如ク教室ニ備フル文献中ニハ少シク類似スルモノヲモ見當ラス故ニ本文掲ケタル異常ハ少クモ最モ稀有ニ屬スルモノナラン。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

校内雜報

●劍道大會記事（二月二日）

嚴寒を冒して午前七時半吾が家を出づ寒氣肌に泌み凍雲低く空を蔽ひ天候今より甚だ氣遣はし果然九時過ぐる頃より白片霏々として飜へり呎尺を辨ぜず行人をして惱ましむると一方ならず出席如何と心細し

定刻九時は來れり委員だに未だ全く集まらず十一時に近き頃漸くに二、三十名の會員本校なる食堂兼扣室假道場目懸けて集ひ來れり部長宮田先生堀師範既に一時間餘以前より開會遲しと待たれたり會場の設備萬端遺憾なしかくして午前十一時一本勝負を以て開會す。

一本勝負

林 ○八島
○○○○眞野 ○卷野
林（鼎）武田 ○○○○○吉原
佐野 ○○川名 鈴木（信）
鈴木（守） 森本
○○水島 川北
○薗 宮森
○菅井 ○森下
○小川 稻田
○橘
○福田

三本勝負

洞、洞（中神 林谷） 洞、洞（小手 示野 澤村）
面、洞（佐川 野北） 小手、洞（小神 谷川）
洞、洞（水小 越堀） ×（松八 田島）
洞、面（早鈴 藤木）

正に十二時半黑板には左の文字を掲げられたり、外には降雪小止み無し午前の來賓國下、吉見、山田、杉山各師範

三十分間休憩、午後一時より再開

午後に至りて高安會長下平理事阿部前部長等も出席せられ來賓も續々參集せられ會員漸く增加せり一時半一同着席再び勝負左記の順序にて進行せり

寒稽古皆勤證書授與

進級證書授與

三本勝貢

突（武林鼎田）

小、面（牧森野本）

洞、洞（小蘭鈴木）

小、小（水面三島戸）

小、洞（牧新居）

小、洞（佐菅井野）

面、洞（高杉島本）

大日本帝國劍道之形

打（佐々木文三）
仕（増田悅）

暫時地稽古開始（其の間に記念撮影をなす）

對校撰手三本勝貢

面、洞　工（竹下今井）　安文德藏

二中（大竹下根）　信近

小、洞　商（安宅稻田）　登喜雄稔郎

面、洞　工（小島橘）　元進之亟

面、小　×面（高金下根）　本万吉信近

小、一中（堂上森本）　一龍捨三

洞、洞　商（北島吉原）　春定靜諭

小、面　一中（西田三戸）　清勝

突、面　高（國岡高倉）　外次郎

小、小　高（今井）　洞橘

面、面（中松）　林田

面、洞（川林）　名

小、洞（小松）　川本

面、面（牧喜）　多野村

洞、面（松鹿）　江野

小、突（供松）　巡視　田本

洞、面　二中（長田福田）　清次稔郎

小、面　高（福島橘）　勝次進之亟

小、小　一中（水邊井出）　鎮次鈇一

以上

（附言姓名の上なる洞、面と記せるは其のもの〻勝ち得たるものを示す）

竹刀の音堂に響き互に勁敵を殪さんとして爭ふ活氣横溢睹る者をして思はず拳を握らしむ例年になく本年は本校撰手よく勵め成績甚だ良好なりき之れ吾人の窺に快とせる所なり優勝者には各〻部長より賞品を授與せり、かくして四時半頃無事會は閉されたり會終りて他校撰手には茶菓を饗し慰勞す、因に曰く本年は諒闇に就き凡て公然の對校仕合は廢止せるものなり、以上は大正二年如月二日日曜日を期して催されたる吾が十全會劍道部大會の略記なり。（砂川生報）

小、小　高（湯ノ川增田）　國丸悅

面　×高（辻岡今井）　德藏

●弓術射初式之記　（二月二十二日）

大正二年二月廿二日午後一時より我弓術部に於ては本校控室に於て射初式を擧行したり此日は高安會長石川部長を始め山碕、下平、金子、村上、上田、宮田、阿部、加藤（靜）、松原、脇坂、加藤諸先生參會せられ且つ此日は十全會講話會のありし爲め參會するもの無數にて非常に盛會なりき、先づ八島君の開會の辭あり次で八島師範、阿部、加藤兩先生を初め近藤、久本、井上、鶴見、松本、原、中田、花房、茶野、朝賀、八島、野村の諸氏出演せり終て茶話會を開き八島氏は本日多數諸先生の御來會を謝し尙此後の希望を述べて樂しく解せるは午後二時過なりき。

●講話會例會（二月二十二日）

曇つたそら、濕つぽい空氣の漂うてゐる二月二十二日、大講堂で例會が開かれた、此日弓術の大會があつたので定刻を遲れて午後二部時長先生の開會の辭によつて始められた。

一、明治の回顧　布瀨七一郎君

最も確實なる回顧は吾人の經過したる歷史なりと前提し幕末の尊王論より說き起し明治聖代を三期に分ち維新前後、日清戰爭前後、日露戰爭前後に於ける代表的人物をあげて吾人の其學ぶべきを說かる。

一、Bibliothek　田中吉左衛門君

「圖書館は內科一部の一隅に在りて每日午後十時まで開館室內また衛生的なり云々」と獨乙語を以て說き次で時間の尊ぶべきを述べて曰く一日睡眠時間を六時間、勉强時間を六時間、休息時間を六時間と假定せば眞に吾人が頭腦を專門科學に費すは一ヶ年約七千六百八十時間に過ぎず、之を一科目に割りあつれば僅に二百九十四時間の割なり、故に其日の學課は旣日頭腦に同化するを要すべく其爲めに大に圖書館を利用せられんことを望むと。

一、獨乙語會話　松江常行君

都合により次回に讓り「醫師と人格」に就いて前回の足らざりしを補はる。

一、勇猛心　水島宣君

吾人が事を成さむとするには勇猛心なかるべからず、而かも腕力や智力のみを根底とする勇猛心は尊重の價値なし眞の勇猛心は德義を根底とせざるべからずと。

一、講話會について　北村虎次郎君

講話會の振はざるを嘆じ其原因をあげ、且つ救濟法として(1)少くとも教授諸先生より四五人の講演を乞ひ(2)各辯士の講演は次第順序を混合し(3)學生の出席を點檢すべしと。吾人は此熱心なる演者あるを喜ぶ。

一、旅行談　土肥教授

講演要領——私の歐洲へ行つたのは明治三十九年三月であつた、橫濱を出帆し瀨戸內海の奇勝を稱しやがて玄海灘に出た、一萬餘噸の船であつたが名にし負ふ荒浪、船の動搖すること甚しい、幸に醉ふこともなく上海に着いた、このあたり海は一面に黃色を呈してゐる、これは揚子江から吐き出す濁流の爲めである。上海の繁華は豫想以上であつた。四五日で此處を辭し香港に着いた。大厦高樓軒を並べて、ほんとに洋行した氣持がする殊に香港の夜景はまた格段、甲板の上から瞳を放つと家々から漏るゝ灯の明滅、濃霧の爲めに絕ねず吹き鳴らす瀛笛の聲は言ふに言はれぬ心持を呼び起す四五日滯在してシンガポールに向ふ時は彌生の中旬であつたが恰も日本の暑中の樣で船の進むに從ひ衣服を脫がればならなかつた。シンガポールからジヤバに行くべく同行の人々に別れた、ジヤバの首府バタビヤにはナイセル氏の研究所がある。……猿に黴毒を移植し得べしとは已に先輩學者により以前から唱道せられてゐたが多くは當時尙陰性の成蹟であつた然るに偉醫メチニコツフ、ルー氏等が猿類即ち猩々狒々類に黴毒を移植し得ることを證明した、次でナイセル氏等の實驗により益々其根底を固められた……實にナイセル氏は其研究所に約六百の猿を養うて今尙ほ盛に研究を續けてゐる。止まること十日許にして再びシンガポールへ歸つた。

一、歐州精神病界（承前）　松原教授

ウイーンから獨乙に入る、Mauer-Oehling には十年程前に建てられた病院がある、此病院は家族的にできてゐて Familienpflege なるものがある、病院の周圍二哩程の距りにある家々を醫師が騎馬で往診する。そして此病院の退院者の爲めに Hilfsverein なる設けがある（アメリカでは After-careassociation といふ）此制度は最初ベルギーのゴールに設けられたものでそれが各地へ擴がつたものである。日本ではまだ行はれてゐない、Hilfsverein は金澤病院の施療患者にも行ひたいと思ふ……。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

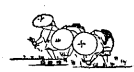
時は早や黄昏とき如月の日空は雪を含んで寒さまた一入、聽衆も大分た腹が空いたらしい。部長先生の閉會の辭にわが講話會の前途を祝福して三々伍々家路についた。（中西生記）

●醫科四年祝賀級會（二月二十四日）

ちらりほらりと雪の空、二の字二の字と浮れ歩りく程に思はず積る傘の雪知邊を訪へど宿借らむに本意もなく、風流もあらばこそと、急ち變る浮世人、なにがしの法師にはあられども歴もあらわに徒洗足、踏み迷へりし舊路を一目散、あやしげながらたどりつけるは二月初めの八日心落ち着くがまゝにさらばと談議一決、茲に恩師下平級長が祝賀に兼れて新年初頭の級會を開く。

會所は病院會議室早咲きの梅一輪〳〵の二月廿四日正午を過くる二時開會萩岡君開會の辭今日の級會の略した述べ先生の爲めに祝意を捧げ降壇、石坂君師の恩惠斯くまでに深しとて先年吐鳳堂店頭に於ける待遇を述懷し尚將來の覺悟を誓ひ、松原先生所感一束の下に學問の中毒を説かれて曰く、吾人は學問を目的とするものにあらず、只吾人が所定の目的に達すべき期間に於ける運用の一材料として之れを修むるに過きずして、只一の方便のみされば這般に於ける主客轉倒の誤解ある不可、修學の要は其の運用に供すべき材料を得れば足る、而かも之の運用に向つては更に同時に一定のXを要求す他なし完全なるべき人格の夫れなりと、諄々切々實話を引証しての御訓戒、尚某氏が醫師の撰定法なりとて奇拔なる方法を擧げて某氏は常に其の土地に於ける郵便局及書店を通して何れの醫師の最も多く書籍雜誌を購讀するかを調査し以て其の醫師を撰するの唯一條件とすとて時代と適應、吾人の將來、人格の修錬と、巨細を分つて懇篤なる教示を垂れ玉ふ次に級長動議として會員の五分間演舌を可決し、田中君雜誌抄讀會の設立に就きてとて紹介賛成を求め、土肥先生「プレスラウ」所感殊に同大學就中ナイセル教授及其教室概要先生獨特の諧謔を交へ説かれて餘蘊なし思はず笑聲の堂を滿す數回宛然身其の人に接し目のあたり其の所を見るの思ひあり時に四時菓子出ず、直ちに五分演舌に移る鍬の御鉢は最先きに小森君弱肉强食。大瀧君「ダニエル、ウエブスター」。蘭守君獨乙語感學ぶに難し學ばれば思ふ彼方のと思ひ入れ一番戸まどひの体。利根川君多額納税功德附成婚紹介。堀田君夢中遊行？とて二例。水口君不平論。松江君報酬論終つて早速御返答と御壽司が出る、御利益や詢に新らたかなりと謹而感謝の意を表し親讓りの夫れにて。

此の時下平級長徐に本日の厚意を感謝すとありて更に級長として前回會記中の一節（責は筆者に）を引きて親の心は可愛き子の旅の夫れぞとの意味に引き續き先生御留學當時の所感よりして訓話數束時の迫まれば改めて次回にとて再び御丁嚀なる謝辭を辱ふして、森部君最後に吾人の試驗偶感より國家經濟に及ぶとて堂々の所説を論し兼れて閉會の辭斯くて豫想外の盛會と活氣に盡きぬ名殘りの惜しまれつゝも芽出度かりし今日を終る、今や本學已に半ばを過きてやがては紅葉散り敷く菊の頃ほひ東西袂を別たなん身の思ひ出に偶ぶ今日の日の會況大略以上の如し單記詳況を不盡、不文時に人に累をなすを恐るゝもかたくなる筆の咎と見て賢しき諸兄が袖に隱し許し玉へや只ありしまゝを端折りてぞ。（未艾生）



●金澤病院醫事集談會の設立

當今醫學の進歩は日に月に開け浸々乎として盡きず爰に金澤病院に勤務せる醫員は一團体を組織して各自の實驗を報告し自己の研究を發表し互に醫事を談して以て各自の知見を擴め月進の醫學に遅れさらん事を期し毎月一回集會を開く事を決議せり名つけて金澤病院醫事集談會と云ふ其規約は左の如し。

金澤病院醫事集談會規約

第一條　目的。

會員互ニ醫事ヲ談シ各自ノ知見ヲ開擴スルニ在リ

第二條　名稱。

金澤病院醫事集談會ト稱ス

第三條　會員

金澤病院在職ノ醫師ヲ以テ組織ス

但研究生ハ希望ニ依リ會員タルヿヲ得

第四條　役員。

會長一人幹事若干名ヲ置ク

第五條　役員當番。

役員ハ毎會各部交替ニ之ニ當リ其部ノ部長ヲ會長トシ醫員ヲ以テ幹事トス其順序左ノ如シ

一、眼科部　二、內科一部　三、內科二部　四、神經科部

五、外科二部　六、外科一部　七、皮膚科部　八、婦人科部

第六條　集會。

開會ハ毎月一回トシ其月ノ第三木曜日午後三時ヨリ始ム

第七條　發會。

大正二年四月ヨリ發會ス

以上

●第一回金澤病院醫事集談會記事

大正二年四月十七日(木曜日)午後三時半眼科學教室に於て開會

當番會長　高安右人

當番幹事　加藤慶三　牧田泰　源明藤吉　加勢基

發會并開會ノ挨拶。　會長　高安右人

白血病ニ於ケル白血球ノ破壞ニ就テ。　奥山義盛(內二)

追加　土肥章司

「アブリノール」ノ「トラホーム」ニ對スル實驗。　加藤慶三(眼科)

追加　高安右人

「トラホーム」ノ食鹽反應供覽。　高安右人(眼科)

鼠咬症ニ「サルバルサン」注射實驗。　佐崎伊久(外二)

追加　土肥章司

肩胛骨ノ急性化膿性骨髓炎ニ併發セル膿胸ノ一例。(患者供覽)　下平用彩(外一)　下平用彩(外一)

本會ニ對スル希望。　會長　高安右人

閉會ノ挨拶。

右にて午後六時散會次回に繰延されたる演題は左の如し

「チフス」ノ凝集反應ニ就テ。　松村喜一(內二)

胃酸醱酵素試驗ノ治療的及診斷的意義。　近藤清吾(內二)

附記　演題の內容は紙面の都合により次號に掲載する事とせり讀者幸に諒せられよ。

●學會參列會員

四月初旬東京及京都に開催されたる醫學會に參列せる學校病院職員諸氏左の如し。

眼科學會（東京）　校長　高安右人
外科學會（京都）　教授　下平用彩
病理學會（京都）　同　村上庄太
內科學會（京都）神經學會（東京）　同　松原三郎
皮膚病學會（東京）　同　土肥章司
內科學會（京都）　同　加藤寛
小兒科學會（京都）　講師　岡本京太郎
外科學會（京都）皮膚學會（東京）　同　田中一次郎
內科學會（京都）　金澤病院醫員　梶川靜夫
內科學會（京都）　同　石川精一
仝上　同　山崎重治
仝上　同　那谷與一
眼科學會（東京）　同　牧田泰

●金澤醫學專門學校

四月八日　化學及分析學實習授業補助囑託　林　精一
依願囑託ヲ解ク
四月十五日　金澤醫學專門學校產科婦人科學副手囑託　仙波宏造
依願囑託ヲ解ク
四月十六日　化學及分析學實習授業補助ヲ囑託ス　新次郎
月手當金拾六圓給與

●石川縣　（三月三十一日）

年手當金千五百圓　院長　山碕幹
同　金千圓　眼科部長　高安右人
同　金八百圓　外科一部長　下平用彩
同　金八百圓　內科二部長　佐々木逵
同　金八百圓　外科二部長　宮田篤郎
同　金七百圓　神經科部長　松原三郎
同　金七百圓　婦人科部長　藏光長次郎
同　金七百圓　皮膚科部長　土肥章司
同　金貳百五拾圓　調劑部長　高山基重
月手當金八圓　調劑員囑託　林常雄
月俸二級俸　醫員　加藤慶三
同　四級俸　同　田中一次郎
同　同　同　田中正一
同　八級俸　同　梶川靜夫

叙任及辭令

●陸軍省

任陸軍二等軍醫　陸軍三等軍醫　茨木忠俊（四三）

月俸八級俸　醫員　影山清美
同　同　同　佐崎伊久
同　九級俸　同　石川精一
同　同　同　芦澤孝治
同　十級俸　同　馬詰定衛
同　同　同　那谷興一
同　同　同　山崎重治
同　同　同　松村喜一
同　同　同　近藤清吾
同　十一級俸　同　古屋榮治
同　同　同　小原隼三
同　同　同　牧田泰
同　同　同　伊藤又吉
月俸金四拾壹圓　調劑員　鷲田發次郎
同　金參拾五圓　同　笠間儀三郎
同　金參拾圓　同　青木他吉郎
同　金參拾圓　同　山碕内藏三
同　金貳拾貳圓　同　松田卷耳
三月三十一日
依願職務ヲ免ズ　調劑員　松田卷耳
四月十四日
依願職務ヲ免ズ　内科一部醫員　田中正一（三一）
四月十六日
依願職務ヲ免ズ　外科一部醫員　芦澤孝治（三八）
四月二十二日
依願職務ヲ免ズ　婦人科醫員　仙波宏造（四四）

通信

●森田齋次氏通信

（三十一年卒業。東京慈惠醫專校解剖教授）

（前略）小生は極めて頑健でも無いが達者です、來月早々英國に渡る積りにて近來は多忙を極めて居る本日大學退校の手續きなぞが終つた、

回顧すれば早や着獨後一年有半歸朝迄で餘す所僅かに半歳となつた、此短かゝらん時日は小生に何を功献したか何も無し、先日も飯森益太郎氏の「はがき」に面白い事はドシ〳〵發表せよとの命令を受けたが誠に赤面の外は無い、只毎日〳〵歸朝したらは何を如何樣になすか歐洲で得た智識が如何樣に如何程應用出來るかと云ふ問題が自からを惱まして居るに過ぎん、強て得た者を云はゞ「キネゼー」と云はれても眞黑助と云はれても不知顏で平氣で群集の中を通る事が出來る程に顏の皮が厚くなつた位の者だ。着獨當時は見る物聞く事皆臍の緒切て初めてと來て居たから一つとして母國に於ける事物との比較に上らんものはなかつた、從て日本を思ひ出す事も屢々で且つ興味も多かつたが此頃は見る物聞く事皆では無いが大部分は既に御承知の事ばかりで婦人が右褄を取て歩かふが手拭の「スコタン」で行かふが顏は班疵で獅子面の樣になつた横柄な學生が通ろ一が一向平氣の平左で目にも止まらん、御馴れ遊ばした御蔭には新に日本との比較に上る事柄も少なく興味を感ずる事柄も亦稀れだ、從て斯ふ云ふては何んだか實際日本を思ひ出す事も以前程頻繁では無い、即ち流學病の第一期は既に經過して正

に第二期にあるのだ然れとも樂々と安坐がかきたい、毎日立つたり腰掛けたりでは仕事爲通しの樣だとは屢々感ずる思ひ出す「ハイムッエ」だ、故に未だ第三期にはなつて居らんのだ歸朝は正に此時にあるでもあるまいが、不止得歸朝せればならんが或は幸かも知れん、第三期ときては鼻持がならん。

獨乙の學術は相變らず浸々として進歩しつゝある、流石に學術上の物質に於て獨立して居る國だけあると常に思はしめる、當「ハルレ」大學の教室なぞでも得んと欲する者、成さんと欲する事の準備は多くは一令の下に出來る愉快さよ否殘念さよ。先づ何には外國に注文せねばならん何は英國に何は獨乙に何は米國に然り而して初めん、では如何んとも仕樣が無いではありませんか、な羅馬は一夜に建設せられたるに有らずだ、が然し眠れる兎は龜にも勝つ能はずだ、早く獨乙に於ける樣な便利が得たいものです。先日當地の Staattheator にて「テル」の劇を見たが、勿論役者が田舍役者で有るからでも有るが彼の讀んでは萬人を感働せしむる傑作が劇としては誠に不自然(?)に思はるゝ所が多く殊に日本人には向か無いと云ふ事を知つた、一例を云ひば林檎を射るや直に卒倒するなぞは、「テル」とも有ふものが此れ位の事に左迄でになつては大事が出來んと思はしめた、西洋劇は兎角落附きが無い樣で何を見ても氣に入らん。

數日前に未だ敢て獨乙國に無いと云ふ犯罪があつた「ベルリン」の近郊の或る曲り角より少しく隔りたる所に何者かゞ兩側の路傍樹の間に鉢金を張つて置た爲めに、夜中其れとも知らずに自働車で通つた主人と子供二人づれとかゞ、其れに掛つて主人の頭は切れて飛び一人の子供は重傷、一人は尙小さいので下と通り拔けたそーだ。御用心〳〵。（下略）

獨乙國ハルレ大學解剖教室にて

森田齋次

大正二年三月七日

●林篤氏通信

（本校教授。岡本京太郎氏宛）

餘寒の候益〳〵御多祥奉賀候爾來小生は至て無事罷在候乍他事御放念被下度候御地は本年近來稀なる大雪の由嘸御困難と存候に付ては洋服に下駄の和洋折衷時代と遙に想像仕居候、本日金澤醫學會席上より會長を御始めとして各位よりの御連書難有正に拜讀仕候每々御懇意奉謝候、下平先生も今回愈〳〵多年御研究の結果月桂冠を戴かれ母校の爲め國家のため慶賀の至りと欣喜罷在候生憎諒闇中のため祝賀會も延期の止むなき由乍殘念又目下可然き事と存候

當地は頃日餘程暖く相成此又近年珍敷き由本日の如き チエッペリン、「フルーグマッシキーネ」が空中を飛び歩き居候當教室も前回申上候通りチエルニ―轉任に付き後任はフライブルグのザルゲ教授と決定致候

先月當地に結核展覽會開催、勿論一は「ポプレール」のためなれば各種の結核標本、「レントゲンビルド」幻燈裝置、結核に關する統計表等供覽の設備怠りなく同時に每晩各專門家の講演あり甚だ盛大なりき、演題左の如し。

1) 8. II. Wesen der Tuberculose als Volkskrankheit und ihre Bekämpfung. Prof. Uhlenhuth.
2) 9. II. Eingangspforten der Tuberculose. Prof. Czerny.
3) 10. II. Tuberculose im Kindesalter. Prof. Chiari.
4) 11. II. Tuberculose und Schule. Prof. Levy.
5) 12. II. Chirurgische Tuberculose. Prof. Madelung.
6) 13. II. Tuberculose und Mundpflege. Prof. Jessen.
7) 14. II. Hauttuberculose. Prof. Wolff.
8) 15. II. Tuberculose und Armee. Oberstabarzt Hormann,
9) 16. II, Tuberculose und Wohnung. Dr, Hecker,

10) 17. II. Behandlung der Tuberculose. Prof. Wenckebach.
11) 18. II. Tuberculose und Alkoholismus. Dr. Dold.
12) 19. II. Auskunfts- und Fürsorgestellen für Tuberculose. Dr. Belin.

此毎晩の演説に市民は先きを爭ひて聽講室へ詰め掛て既に開會三十分前已に入場謝絶の有樣にて小生も二回滿員のため已に開會前に門前拂を受け止むなく歸宅致候、獨國が學問的研究のみならず一方には常に公衆に向て衛生的思想の普及に各種の方法を以て勉め居るは感心に御座候此に準じて公衆も亦此の如き通俗的の衛生演説及展覽會に向て一般に等閑に附ぜざる事は注目に値致候既に國民の衛生的思想も遙に進歩致居るは事實と存候此に反し乍殘念我國にては未だ幼稚と言ふも憚からず彼の夏期擧行の衛生講話等の際に警察力を以て聽講者を集めねばならぬのと聊か差異有之事と存候勿論追〻には進歩する事は必定と存じ候へ共又一方には折角御同樣益〻其普及に勉めねばならぬ事と今更ながら深く感じ居候

林喜久松君も愈〻御渡歐の由金澤醫界のため慶賀と存じ無事着歐の程祈り居候

愈〻又來月は學會月と相成既に學校病院其他の諸賢も多數御上京の事と存候、取急き亂筆御判讀被下度右近況御報道如斯に御座候尙時下折角御自重願上候早々

大正二年三月七日夜　　獨乙國ストラスブルグ大學ニテ　林　篤

馬場庄江氏通信

（四十三年卒業。滿洲安東縣病院。高安校長宛）

拜啓其後御無音に打過ぎ居り候處先生始め皆々樣益〻御健勝の段大賀奉り候下て小生事毎日無事消光まかり在り候間他事なから御安神願上候去る一月二十五日門司出帆致せしは午後一時頃にして始めは風波穩かなりしが午後四時頃より玄海灘に入りては暴風雨起り波高くして舟の動搖激しくして食堂の脇に積みたる行李なぞはころ〳〵轉倒致し候其故其晩食は炊く事を得ず「パン」も燒く事を得ず全乘客は其晩一食だけは斷食致し候小生事生來船嫌なる爲め寢室に横たわりたるまゝにて絶對的安靜を守りし故嘔吐も起すに至らざりしは先つ幸いの由にて候二十六日は朝鮮近海の島多き處を航行し誠によき景色を眺め申し候始終甲板上に立ち居り嬉しき一日を過し候二十六日の午後より二十七日の朝までは黃海中を航し全く空と海との間を進み山も島も見るを得ずして寂しく過し申候二十七日大連につきしは午後一時頃にて阜頭の大なるには一驚致し候阜頭にて矢吹君に出向へられ早速病院に行き喜多村醫長及び河西院長に面會致し候其れより毎日眼科の外來を見學し一廻間滯在致し候尙外來患者は六七十人あり入院は少なくして十二三人にて候暗室にはなか〳〵高價なる機械を備へ居り候には驚き入り候然し細菌の設備は皆無と云ふてもよろしかるべく候右は院内にて細菌部を設けて其れに一任致し居り候ッツセルマン氏反應を盛に眼科診斷に應用致し候又再發生出血生網膜炎は原因結核なりとして「ツベルクリン」注射療法を致し居り候大連の市街は實に立派なるものにして日本ならば東京の銀座の如き華美を呈し居り候大連滯在中一日旅順見物致し候就中東鶏冠山砲臺及び北砲臺が爆發せられて大砲が土中に埋沒せられ一部露出せられたるまゝにて放置せられ居り候無言のまゝに其當時の慘狀を物語る如く見ゐ十年前の武夫共の夢の跡感し深く偲ばれて歸り申候去る二月三日に奉天に着し病院に一宿致し久保先生にも面會致し候處遠隔の地にありて同窓の先輩に會いし事なれば大に力强く感じ申候又先方にても大に喜ばれ滿洲にて一度同窓會を開かんなど申され一飯御馳走になり學校の先生の話しなど致し一夜遲くまで語り相ひ申候奉天平野は山を見る事を得ざる程廣くして日の出日の入りなどは太陽が眞赤色になりて笠大に見ゐ候奉天の城内及び宮殿を

拜觀致し明る四日に安奉線に乘り午後五時頃安東着仕り候安奉線は滿洲の耶馬谿と云はる程にて大に景色よき處にして始終窓外の景の變化するを眺め時の移るをも知らず經過致し候當地は鴨綠江の河岸にして舊市街（支那町）と新市街とに分れ支那町は五六萬の人口を有し新市街は八千餘の日本人住居致し居り候氣溫は三寒四溫とか申し寒き三日間は零下二十七八度に降り大に晴天にして北風烈しく候四溫の日は空臺りて五六度に昇る事御座候少しも雪なくして其れに晴天なるに寒氣强き事は一寸めづらしく感じ申候鴨綠江の河水は全部結氷し人馬の往來繁く「スケーチング」盛に行はれ居り候江の向へに白馬山と云ふ山高くそびい立ち此の山のみは山白く雪を頂き居り候此の山の南麓の平地に二師團を設置せんとしたる由に候（前陸相が）病院内は醫院が五人他に院長と醫長と合せて七人にて候分科は内科、外科、産婦人科、眼科、醫科の五科に分れ居り候宿直は醫員一名づゝにて候故小生の宿直の時内科患者の處に往診せねばならぬ事も且又夜間外傷患者なと來る事ありて大に困り居り候漸々なれるに從つてよくなるならんと存じ居り候過日も小生の宿直の時夜間重症患者入院を乞ひ來りて診療致し候處「チブス」疑ある故隔離室に入れ明日院に再診を乞ひしに果して「チブス」にして先づ〳〵失敗せざりしを喜び申候病院内には小使に支那人を使ひ居り候苦力（クリ）と申し居り候誠に從順にしてよく働き居り候苦力は俸給がやすくしてよく働き大に便利なるものにて候全部にて二十人位居り候眼科の患者は入院が目下三人にて外來が三十五六人より四十名位御座候支那人一名「ブレノロイ」にて兩眼角膜犯されたるもの入院致し候處「カルボール」洗滌にて近來指數を辨する樣になりしかば大に喜び居り好々的ほしくてと申し居り候朝鮮人も時々外來に來り居り候就中遠方より來るものは義眼を一人にて五つ位買ひ行くもの御座候寒風烈しき爲め破損しやすき由に候眼内にあるまゝにて風に會ふ時は破る事ある由に候支那人の通譯一名と朝鮮人の通譯一名病院に居り候故支那語を知らずとも少しも不便を感ぜず候朝鮮婦人が結膜を飜轉させる事を嫌ふは閉口致し居り候支那語は未だ覺ゑざれとも眼科に來る患者に用ふる語を次に述ふれば

霞ムカ　眼花（エンホワマ）
涙ガ出ルカ　眼流涙有沒有（エンリウルイユウメーユウ）
眼脂分泌アルカ　眼脂有麼（エンツーユウーマ）
イツカラワルイカ　眼脂（ツントーザブハカ）從多儕不好

態々面白き事御報申上べく候餘は後便にて先つは近狀御伺まで謹言

滿洲安東縣安東滿鐵醫院眼科　馬場庄江

●村上盛窄氏通信

（四十三年卒業。軍醫學校。奥山義盛氏宛）

拜啓冬眠の時期も最早經過し愈く樂しき發芽の期と相成候兎角其後は永く御無音仕り實に申譯無之何卒不惡御寬恕被下度候さて貴兄には御變りも無之候や御伺上候降りて小生事先月一日上京三日より通學致居候今回の普通學生は二十一名にて中母校出身者三十八年卒業の並河權六氏（一等軍醫）あるの他千藥、仙臺、岡山の各醫專出身者の順序にて占領せられ居候日課は午前八時より午後四時迄にて母校時代と異なり實習本意にて患者は學校附屬の診療部及濟生會診療部の一部を診療するとに相成居候に付材料は至て豐富にて研究の便有之候午去御地に於ける學界及俗界の景況如何に御座候や御暇の折は一寸御洩被下度小生も務めて御報知申上度候尙當市に於ける用向は何なりとも仰付被下度候午末筆辱知諸君に宜敷御傳被下度候先は乍延引御伺迄匆々不一

東京市九段中坂千代田舘内　村上盛窄

◉村上三男三郎氏通信

（大正元年卒業。新潟長谷川病院在勤）

（前略）尙當地に來つて日も淺き事とて病内の事狀をだに明ならねばまして當地在住の金澤出身者の狀況等は全く知る由も無くそれや是れやの爲に思ひ乍らも失禮仕り候何卒惡しからず御了察下され度候實は自分も追〻附近の學友を訪ひ追〻御報申上ぐる考に候へしも當院も日に〳〵多忙と相なり候と且つは私立病院の悲しきとには時間の規定等は全然空と等しく患者も多からざるに早朝より日暮に至るまで病院に爲すとも無しに遊び暮す次第にて三日目毎に宿直せざる可からず其折りは夜間の勤務は勿論なれど看護婦にまで講義もせざる可からず又縣立學校醫として毎週中學及師範等も病院勤務の後には訪はざる可からず其他何彼となく馬鹿らしき事にあたら月日は空しく行き過ぐるのみにして机に向ふ時等は殆ど無き樣なれば藪的の頭は少しも進歩を見ざるのみか盛々退行萎縮するのみにて何と無く心細く感ぜられ候も只〻母校や十全會の名は穢さゞる樣にと心願致し居り候何れよき後任者もあらば御地に參り又々御厄介と相なり度く（今少し頭を固め度く）と希望致し居り候何分今後も變りなく御示敎を仰き度御願申上候

當院の狀況に就ては既に先生には萬事御了承の儀と存じ候が當院は舊來縣下に於ては外科病院としては多少知られたる所にて主として縣内の患者のみにて其他間〻船客等も見受けられ候も新潟醫專校に比して患者總數に於ては劣り居り候然れど各專門科に就ては目下尙ほ縣下に冠たるの患者數を有し居る由に候

現今當院の專門科目は外科と皮膚科との二科にて外に市外青山に神經及精神病科の分院有之候而して院長は外科部長にて副院長は皮科部長に御座候目下外科部は部長の外醫員三名にて皆老練家とも申す可き人々に候も皮科は部長の外は青二才の小生一人に御座候藥局は藥劑師二名にて事務受附は三名の樣に候病舍は市中に於ても最舊式の方なる可く病室も僅か三十箇にも足らず候も外科器械類より手術室（普通外科手術場幷に開腹術場等）X光線室、溫室及び洗滌室動物小舍等地方私立病院としては比較的整備せる部類に屬す可くと思はれ候院長は東大、副院長京大、調劑師一名は私立學校の出身小生の金澤出なるの他醫員及藥劑師は皆千葉出身とかの由に承はり居り候又分院即ち青山腦病院（新潟）にては分院長は東大の出身にて醫員は一昨年金澤出身の寺本君の外に尙ほ一名（千葉出？）に御座候分院にては事務調劑師各一名看護人數名にて建築は未だ新らしく候も設備は最新式とは申し兼ね候然れど入院は中々に多數に御座候當所は市外遠隔の地なれば多少の不便はまぬかれざる儀に候も土地の高爽閑靜なるが上四隣の風光又稱するに足るはいさゝか誇りとする處に御座候又古來新潟の地たるや杉樹不育の地として世人の傳ふる所實に市内僅か三本の杉樹を數ふるのみなるに其一樹の今小生の遊ぶ院庭に白雪を戴いて名物の一つとして患者に慰安を與へ居り候愚生は未だ何のあるばいとにも着手せず誠恥かしき次第に候境遇に追ばるゝとは云へ餘りの不甲斐なきには自からあきれらるゝ事も屢〻に候

市内の狀況や學友の近狀等は達筆なる櫛田君其他の諸兄よりも御報有之候儀と察し居り候何れ生等も金澤出身者の會合を計りたく目下相談中に御座候何よりも十全會の盛に健全ならん事を願望致し居り候

新潟市百堀通長谷川病院内

村上三男三郎

◉竹中繁次郎氏通信

（三十年卒業「ドクトル」。東京國民病院長。十全會宛）

十全會東京支部のことに就ては目下萬事生沼曹六氏の力を俟ちつゝあるは

茲に蹶々するの要なし亦た全氏も本校の先輩として此東京十全會支部のことに就て敢て御盡力を惜まれざるは支部員一同の大に感謝する所なり是に於て今回全氏の學位受領を機として誰れ言ふとなく全氏のために祝宴を張らんとの説出で去四月十八日授與式のありたる翌々二十日は日曜日なるを好機會とし花の「トンネル」の其亦奥の「植半」てふ向島名物の一茶店を會場と定め生沼博士を正賓として一會合を催し申候何にしろ舊知全志のことゝて名々胸壁を披き又た何の裝飾もなく舊在校中の可笑しき談論を盛に持ち出し「ある時はアーだつた。此の時はコーだつた」など自慢話を以て酒杯と共に浴せかけた人々もあり殊に某病院長の義太夫。某「ドクトル」の端歌と來ては滿場の酩酊正さに 100°C. に達し或は正宗の佳否を論駁し得田氏亦た横濱より特に來りて席にあり例の御得意の一詩「抽出歐洲華……」を賦して生沼博士に贈り兎角する裡に時は移りたるに就き主客各々快哉を叫んで共に歸路に就き途中三々伍々生沼博士の萬歳を祝し握手の影は皎々たる天涯の月と相俟ちて友情の厚きを覺ゆること深かりき。

大正二年四月二十一日　　東京神田區小川町七二　竹中繁次郎

入事

●生沼。岡島兩博士

本校出身の東京慈惠醫學專門學校教諭生沼曹六氏及び京都醫科大學解剖學教室助手岡島敬治氏の兩君は先きに各々論文を提出して學位を請求中なりしが東京醫科大學教授會に於て醫學博士の學位授與を承認し去四月十八日文部省に於て兩氏は全學位を受領せられたり。

本校の前身たる金澤甲種醫學校卒業者にして學位を得たる者は本校の金子博士を初めとして岡山醫專に奉職中の上坂熊勝博士（解剖學）及び桂田富士郎博士（病理學）の三博士あり第四高等學校醫學部時代の卒業者としては本校の松原博士あり漸く此四人に過ぎずして他の醫專校の卒業者に比し稍や遜色あるを遺憾とすること久しかりしに今此の兩氏の新たに學位を受領せられ茲に本校は六博士を輩出するに至り。

生沼博士は生理學を專攻し學識深遠、才氣横溢、頭腦明晰にして誠に當今得難き好學者たり。岡島博士は亦た勤勉力行、篤學誠實、思想緻密にして前途最も有望の好研究家たり。全氏共に尚ほ春秋に富み學界は兩氏の奮勵と研究とを要すること更に切なるものあり。吾人は兩氏の爲めに、兩氏の家門の爲めに、果た亦た吾校のために兩氏の名譽を祝すると共に又兩氏の自愛を祈ること深し。

尚ほ兩博士の肖像と略歴とは次號にて紹介すべし。

●生沼曹六氏

全氏（三十七歳）は金澤市の出身にして去三十一年本校松原教授と共に第四高等學校醫學部を卒へ上京して東京痘苗製造所の技手となり元と本校教授たりし所長野田學士の下に細菌學を修め三十三年より東京醫科大學生理學教室の助手となり七年間大澤謙二博士の下に生理學を專攻し四十年東京慈惠專門學校の教諭となりて生理學の講座を擔任し四十一年九月同校より獨乙に留學を命ぜられ尚ほ英國の劒橋大學に轉學し三年を經て四十四年八月歸朝し復び同校に教鞭を執りつゝあり全氏の學位請求論文は左の如し。

一、器械的神經興奮の理論補遺。（獨文）

附加參考提出論文

一、濃厚溶液による神經刺戟。
二、龜の心臟前房の緊張變化に及ぼす迷走神經及び交感神經の影響に就て。
三、鼓舞神經及び抑制神經の働き法に就て。
四、龜の骨格筋の固有週期に就て。
五、「ストリヒン」にて中毒せしめたる蛙の脊髓の窒息痲痺に就て。
六、明所に適應せる片眼の助けを借りて他眼の暗適應を檢す。
（以上獨文）

●岡島敬治氏　仝氏（三十二歳）は越中の人家は世々醫を業とす明治三十五年本校醫學部を卒へて金子博士の下に本校講師を勤め後京都醫科大學解剖學助手となり鈴木博士の下に斯學を研究し日露役には軍醫として出征し解隊後再び前職に復し三十九年長崎醫學專門學校教授に新任せられて解剖學講座を擔任せしも後三度京都醫科大學助手に轉任して今日に及べり仝氏の提出論文は左の如し。
一、「ヒノビウス」の聽器の發生學。（獨文）
參考論文
一、有尾兩性類聽器の研究補遺。（佛文）
二、「ヤニヒヨグクチルス」の五官器研究。
三、鮑幼魚の「マクラネグレクタ」の發生。
四、有尾兩棲類聽器の骨性又は軟骨性三半規管の研究補遺。
五、同聽器に於ける二個の外淋巴管孔の發現に就て。
六、「ヤニヒヨダクチルス」の骨學。
七、「ヤニヒヨダクチルス」の舌骨鰓骨騎。
八、本邦產大鮑魚の聽器解剖
九、同嗅器解剖。（以上獨文）

●千秋　了氏　仝氏（三十九年卒業）は福井縣足羽郡下文珠村下細江に開業中なりしが去四月一日逝去せられたり謹んで吊す。

●辻岡　律氏　仝氏（三十年度卒業）は東京淺草にありて多年開業に從事し業務大に發展中なりしに不幸にして淺草大火のため一昨年四月類燒の災難に遇はれたりしも其後更に大規模の醫院を新築し更に醫士二名を聘して去二月落成し從前の通り益々盛大に診療を開始せられたり。

●田中正一氏　（三十年度卒業）從來金澤病院內科一部主席醫員として山碕院長の下に患者診療に從事して世評高かりし仝氏は今回職を辭し市內長町一番丁・鹽川町入口に於て去る四月二十一日より內科小兒科の診療に從事せらる。

●辻本辰次郎氏　（三十三年度卒業）は能州七尾神明病院長として長く高評を博し居られしが一昨年獨逸に留學し今春ドクトルの學位を得て歸朝されしが今回市內長町一番丁香林坊大神宮裏手に眼科專門にて開業せられたり。

●芦澤孝治氏　（三十七年度卒業）は久しく外科一部醫員として下平博士の下に敏腕を振はれしが今回職を辭し福井縣小濱病院の外科主任として赴任せられたり。

●仙波宏造氏　（四十四年度卒業）は卒業後婦人科に醫員として且副手として勤勞せられしが今度辭職の上東大婦人科教室にて尙一層の研究をなされむ爲め東上せらる。

●種子田秀吉氏　仝氏（三十七年度）は以前沖繩縣那覇に開業中なりしが此度鄕里鹿兒島縣川邊郡知覺村郡に開業せられたり。

●岡田虎介氏　仝氏（三十八年度卒業）は此度嚴父逝去のため亡嚴父の名義を踏襲して岡田總太郎と改名せられたり。

●神岡藤一郎氏　仝氏（三十八年度卒業）は以前臺灣臺中醫院に奉職中なりしが此度臺北市龍匣口に開業せられたり。

●安積　鼎氏　仝氏（三十八年度卒業）は以前神戸市伊藤醫院にあり

て奉職中なりしが此度兵庫縣加西郡加茂村の故里にて開業せられたり。

山下鎭吉氏　仝氏（三十八年度卒業）は以前舞鶴衛戍病院に奉職中なりしが此度臺南衛戍病院に轉勤せられたり依て仝病院には左の本校出身者三君あり。

山下鎭吾（三十八年醫卒業）
笠松彦次郎（四十二年醫卒業）
大江忠三（四十一年藥卒業）

梶川甚一氏　仝氏（四十一年度卒業）は以前山口縣の宮原病院に研究中なりしが此度郷里備後國三原町にて開業せられたり。

相馬甲五郎氏　仝氏（四十二年度卒業）は此度福島縣立福島治療院を辭して東京に歸り麻布區の中山家に入籍して中山甲五郎と改姓せられたり。

村松貞治氏　仝氏（四十二年度卒業）は以前長野縣須坂町須坂病院に奉職中なりしが此度郷里新潟縣中頸城郡大湊字中村に自宅開業を開始せられたり。

阿波加憲吉氏　仝氏（四十四年度卒業）は富山赤十字社病院を辭し研究のため上京せられたり。

稻垣久實氏　仝氏（大正元年度卒業）は卒業後郷里名古屋市に歸省し仝市東區武平町後藤産婦人科醫院にありて斯學の研究中なり。

永山昇一氏　仝氏（大正元年度卒業）卒業後は上京して佐々木杏雲堂病院に奉職中なりしに此度神奈川縣平塚の海岸にある仝杏雲堂病院の分院に轉勤せられたり。

轉居會員

富山縣西礪波郡是戸村字岡御所村　吉江彖太郎（三四）
日高國新冠郡高口村　武曾三郎（仝）
鹿兒島縣川邊郡知覺村郡三四七　種子田秀吉（三七）
岡山歩兵第五十四聯隊　長谷眞美（三八）
對馬重砲兵大隊　谷澤一郎（仝）
臺北龍匣口居二六五東隣　神岡藤一郎（仝）
兵庫縣加西郡賀茂村ノ内西鈴坂村　安積鼎（仝）
臺南衛戍病院　山下銀吾（仝）
豐橋市吳服町裏　原久雄（三九）
青森縣南津輕郡常盤村大字福島　今井七兵衛（仝）
神奈川縣足柄下郡吉濱村吉濱　池谷運平（四〇）
朝鮮大邱臨時朝鮮派遣隊司令部　武藤匡一（仝）
大阪府泉南郡檀井村　伊阪春（仝）
靜岡縣庵原郡興津町中宿　伊藤春馬（四一）
備後國御調郡三原町　高野政二（仝）
東京市麻布區森元町二丁目二　中山甲五郎（四二）
新潟縣中頸城郡大湊村字中村　村松貞治（仝）
信濃國諏訪郡高島病院豐田分院　磯貝一貨（四三）
東京市本郷區元町二ノ廿一　阿波加憲吉（四四）
福井市江戸下町河野病院　南部健一（仝）
廣島市大手町四ノ四二福井方　平泉泰藏（仝）
東京神田駿河臺佐々木杏雲堂病院　宇佐美保久（仝）
水戸市上市南町宮城清作方　鈴木康弌（大元）
愛媛縣伊豫郡松前村本村　近澤信盛（大元）

◉居所不明會員

御存知の諸君は御手數ながら本會へ御一報下され度願上候
但し姓名の上に◎印あるは最近に不明となりたる會員諸君なり

舊住所

東京市芝養生園　園崎純次郎（二九）
大阪市東區京橋三丁目　森岡惣太郎（仝）
大阪府立高等醫學校婦人科教室　◎小山田基（三六）
長野縣上水内郡長野町　◎須田嘉三郎（仝）
石川縣能美郡小松町字京町　松村四郎（三七）
朝鮮京城旭町二丁目　富久尾溪（仝）
東京陸軍々醫學校　江藤潤一（仝）
長野縣小縣郡丸子村　下村義二郎（仝）
臺南衛戍病院　後藤義賢（仝）
朝鮮大邱同仁病院　西尾岱抱（仝）
近衛工兵大隊　窪美一久（三八）
近衛歩兵第一聯隊附　並河權六（仝）
朝鮮歩兵第四聯隊附　水上俊三（仝）
鹿兒島歩兵第四十五聯隊附　◎松井源長（仝）
工兵第九大隊　西村順八（三九）
兵庫縣神戸病院　本城熊三郎（仝）
門司市西川端町二丁目　戸井源吾（仝）
獨乙國ミュンヘン市　松久祐馬（仝）
高知縣高岡郡須崎古市町　藤井茂（仝）
近衛野砲兵聯隊　木下節三（三九）
新潟縣中頸城郡新井町　鈴木政治郎（仝）
兵庫縣柏原病院　吉武安男（三九）
廣島縣高田郡吉田町　瀧澤武藏（四〇）
京都市上京區新麩屋町通　内田貞春（仝）
京都府綴喜郡有智郷村字内里　水口順（仝）
福井縣立病院　五井康平（仝）
札幌北一條四丁目　楠正之（仝）
東京芝神谷町　松本文二（仝）
靜岡縣駿東郡沼津町大字新町　山中房次郎（仝）
金澤騎兵第九聯隊附　◎岡田久多（四〇）
大阪地方幼年學校附　◎太田勘市（仝）
奈良歩兵第五十三聯隊附　◎朝日昊（仝）
朝鮮駐劄軍司令部附江原道原州守備隊　中谷内義雅（四一）
東京市神田區駿河臺井上眼科病院　河崎正雄（仝）
朝鮮江原道春川守備隊附　奥山正雄（仝）
石川縣鹿島郡矢田郷府中一ノ瀨　◎長田八三郎（四一）
東京市芝區田村十九富田三十郎方　◎河合勝（仝）
兵庫縣立神戸病院外科　◎岩井尊宗（仝）
佐渡國羽茂村本郷　勝部方策（四二）
房州北條町北條病院　◎山岸岳（仝）
大阪市北區絹笠町同生病院　◎三上儉次（四四）
東京市駿河臺杏雲堂病院　◎清水憲策（仝）

※　※　※　※　※　※　※

會告

●自大正二年三月廿三日至同四月廿三日校外特別會員會費納付調書

金額	期限	氏名
金四圓	自明治四十二年度至大正元年度四ヶ年分	神岡藤一郎君
金拾圓	自明治四十四年度至大正九年度十ヶ年分	厲家福君
金四圓	自明治四十二年度至大正元年度四ヶ年分	片岡正君
金四圓	自明治四十四年度至大正三年度四ヶ年分	長井健男君
金壹圓	大正元年度一ヶ年分	淺野達也君
金參圓	自明治四十年度至明治四十二年度三ヶ年分	佐野愛二君
金五圓	自明治四十四年度至明治四十四年度五ヶ年分	臼井順太郎君

以上

通俗醫事講談會

當今人身ノ健康ヨリ劣フルノ傾向ハ各方面ノ注意ヲ惹ク所覆フベカラザルノ事實寒心ノ極ナリ

抑モ健康ヲ保全シ心身ヲ強メ立身報國ノ基ヲ立ツベキハ國家多事ナル今日特ニ分刻モ忽セニスベカラザルニアラズヤ

思フニ各人醫事衛生ニ關スル知識ヲ進メ細心注意シテコノ忌ムベキ傾向ヲ退ケ進ンデ健康ヲ盛ナラシムベキハ何人モ意ルベカラザル所ナリ

茲ニ於テ吾人ハ學校ノ後援ヲ得、社會教育ノ方面ニ活動ヲ開始シ以テ國家ノ文運ニ資セントシ、通俗醫事講談會ヲ開ク。

於金澤醫學專門學校大講堂

四月二十七日自午後壹時　傍聽隨意

一、開會ノ辭　高安會長

一、青年時代ノ身體ニ對スル領見　醫科三年生　大村作太郎

一、生体ノ自衛　醫科四年生　松江常行

一、風呂ニ就テ　醫科四年生　石坂正義

一、花柳病ノ害毒　醫學博士　土肥章司

一、文明ノ身体ニ及ホス影響及ビ人種ノ改良　醫學博士　松原三郎

一、衛生道德　醫學博士　高安右人

一、閉會ノ辭　山碕副會長

一、附帶　醫事ニ關シ通俗的最モ必要ナル標本ヲ展覽ス

以上

金澤醫學專門學校十全會講話部